

校長先生の部屋だより

哲学ルームだより



この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。

今回も前回に引き続き「人格」についてです。前回は「人格とは人間の価値である」について哲学しました。

A：人間の価値とは、「命の重さ」プラス「人としての価値」だと思います。人格は「人としての価値」の一つです。

—「人としての価値」とは？

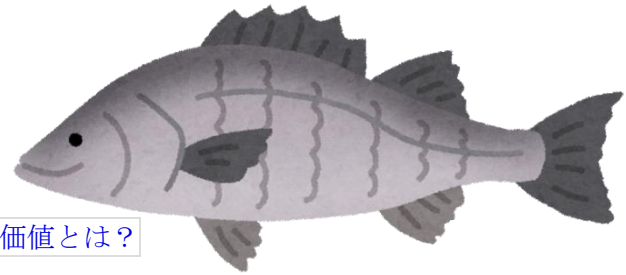
B：愛嬌だとか信頼がおけるとか。

A：外から見た印象だとか、接し方とかもあると思います。

—う〜ん。じゃあ、「価値」って何だろう。例えばこの時計の価値とは？

B：実用性とデザインです。

A：人から見て、いいとか、欲しいとか、必要と思われることです。



—なるほど。じゃあ、「人としての価値」とは「人から見て、いいとか、欲しいとか、必要とされる、ということになるのだろうか。例えば、ある人がある会社が必要とされるというような。「人としての価値」とはそういうこと？

B：（それは違う、みたいな顔をしている。）

—逆に言うと、人から必要とされない人は「人としての価値はない」ということかな？

B：蟻は人間にとって価値はないからつぶされる。でも言葉も通じない宇宙人が現れて、地球上に住むところを探すようになると、地球人は宇宙人にとって価値のないものになってしまうと思います。

—何々にとってというのは相対的だということだね。じゃあ、人から見てどうこうというのでなしに、人間にそれ自体の価値というのがあるのだろうか。

A：それが「命の重さ」です。「人としての価値」がどんなに低くても、例えばマイナス10でも「命の重さ」が1だとして、1であることに変わりはないんです。1-10が-9にはならない。1は1です。

B：でもそれだと人間の命の重さも蟻の命の重さも同じになっちゃう。

A：「人の命の重さ」と「蟻の命の重さ」は別です。「人の命の重さ」は「人の社会」の中で成立する、「人の価値」です。これに対し「蟻の命の重さ」は「蟻の社会」で成立する、蟻が見た「蟻の価値」です。

B：でも蟻の社会の良い悪いなんて分からないし、そもそも蟻に良い悪いなんてあるの？

A：あります。女王蟻が頂点にいて良い悪いを決めているんです。だから働き蟻は働くんです。

—つまり「人の命の重さ」や「蟻の命の重さ」は人間にとっての価値で、人間にとって「人の命の重さ」の方が「蟻の命の重さ」より重い、ということですね。同じように蟻にとって「蟻の命の重さ」の方が「人の命の重さ」より重い。なるほど。今日も時間が来てしまった。